

外国語教育における文化の位置づけ

広島大学大学院 竹 中 龍 範

1. はじめに

外国語教育の目標として *communicative competence* の習得が叫ばれており、その具体的な問題は様々なところで論議的となり、種々の主張がなされているが、本論ではその文化的側面に関わる問題を少しく考察してみたい。

まず、学習指導要領を見てみると、中学校の具体目標の3に「外国語を通して、外国の人々の生活やものの見方について基礎的な理解を得させる」と謳われており、高等学校については「基礎的な」という字句が削られている。これは学習指導要領が文化教授を外国語教育の目標のひとつに掲げているものと解されよう。しかし、ここで考慮すべき点として「外国語を通して」という部分の解釈がどのようになされるべきかということがある。これを踏まえつつ、以下論を進める。

2. 言語と文化

言語を研究する際には、Greenberg の述べるように、2つのアプローチが考えられる(②:1)。すなわち、ひとつはその言語の文法を構成する諸規則に従う記号の体系として言語を捉える方法で、他はその言語の話者により共有される、文化によって伝えられた一連の行動パターンとして捉える方法である。前者の立場からは、例えば、教材の作成等において示唆を得るところもあろうが、言語教育における言語というものの意味を考えるならば、言語教育全体としては後者の立場に多く示唆を求めるべきであろう。すなわち、Sapir-Whorf の仮説の検討は他の機会に譲るとして、われわれは文化を反映した言語というものを言語教育という語句の「言語」という部分の意味と解したい。

英語の *culture* という語には次の2つの意味があるということは、House の指摘を俟つまでもなく(③:58)、すでに周知のことである。すなわち、一方は文学や音楽、美術などの人格を洗練するのに必要とされる伝統的、人文主義的な概念の *culture* であり、他方は社会学者のいう、共同体の生活様式全般、行動パターンの体系、価値観などを包みこむもっと大きな概念としての *culture* である。前者が言語教育、殊に外国語教育の目的論などと関わりを持ちつつ、大きな位置を占めてきたことは否定しえないであろう。しかし、後者についても、外国語教育に対する影響は多大なものがあつた筈である。Lado の言語、文化および個人の関係を示したモデル図に従えば(⑥:6)、言語の領域内における意味の指導ばかりでなく、文化的意味まで含めた意味の指導が、体系的であつたか否かは別にして、これまでの外国語教育においてなされてきた、あるいはその方向が求められてきた筈である。例えば、POD の 'dog' の定義、'Quadruped of various breeds allied to wolf & fox, noted for serviceableness to man in hunting, shepherding, guarding, & companionship, & for antipathy to cats' における shepherding などは、日本人には連想が困難であるが、文化的意味であろうし、それを反映した教材もあつたであろう。このように、言語と文化を切り離してしまうことは言語を無機物化することであり、言語教育の場にあつては求められるべ

からざる姿勢であろう。

3. 文化教授の目的・意義

外国語教育における文化の位置づけを見ると、Jespersen は、言語教育の最高の目的は広い意味における当該国の精神に近づくことであるとして(⑤: 9)、その精神というものに文化を含めている。また、Rivers は外国語教育の目的を6つに分類した中に、学習者の個人の教養を高めることと、国境を超えて外国の人々を大いに理解させること、という2点を含めているが(⑧: 8-9)、これは前節の House の culture に対する2つの定義に照応するものである。一方、文化教授の目的を異文化間コミュニケーションと異文化間理解に求めるものとしては、Nostrand (⑦: 4) や House (③: 58-59) などがある。また、Tucker and Lambert は communicative competence を発達させるには、その言語の習得ばかりでなく、その文化についての認識も必要である; と主張しているが(⑩: 26)、それぞれ互いに異なったことを述べているものではない。文化教授の目的として述べられているものはすなわち言語教育の目的であり、言語教育の中における文化教授の目的とか、文化教授の中における言語教育の目的とかが云々されるべき性格のものではない。というのは言語教育における言語が文化と切り離せないものであるからである。ただ、そこにおける文化の意味を再考してみることは必要であろう。文化のいかなる領域を、いかなる方法で教えるべきか、ということを考えてみたい。

4. 目標文化の分析の視点

文化のいかなる領域を捉えるべきか、という問題を考えるには、目標文化をどのように分析するか、いかに切り取るかを考えてみることもひとつの方法であろう。言うまでもなく、それにはいくつかの方法が考えられる。鈴木氏は「あらわな文化」と「かくれた文化」という捉え方をしており(⑩: 15-18)、また、井上氏は「異文化間で同じ形式をとるが、異なる意味を表す場合」、「異文化間で同じ意味を表すのに異なった形式をとる場合」、「異文化間で同じ行動(Behavior)が+(positive)の価値をもつ場合」、「-(negative)の価値をもつ場合」、「ある文化圏にみられる行動が他の文化圏にはみられない場合」という4つの視点を設けている(④: 27-28)。いずれも文化の分析に一視座を与えるものであるが、言語教育に対する文化の拡がりを見ると次のような基準も必要ではなからうか。すなわち、「言語あるいは言語使用に直接的に関わる文化の側面」と「言語あるいは言語使用に直接的には関わらない側面」という見方である。前者には音声・文法・語彙、paralanguage, kinesics, speech formula などが含まれる。ただ、この2側面を明確に区別することは不可能であり、その間に漸移帯を設けることは必要であろう。そして、これら3視点を立体的に組み合わせて、それぞれのアスペクトを分析すると同時に、それらの相互作用的領域を明確にし、それをその言語を包みこむ文化の全体系の中に位置づけてみる必要があるであろう。

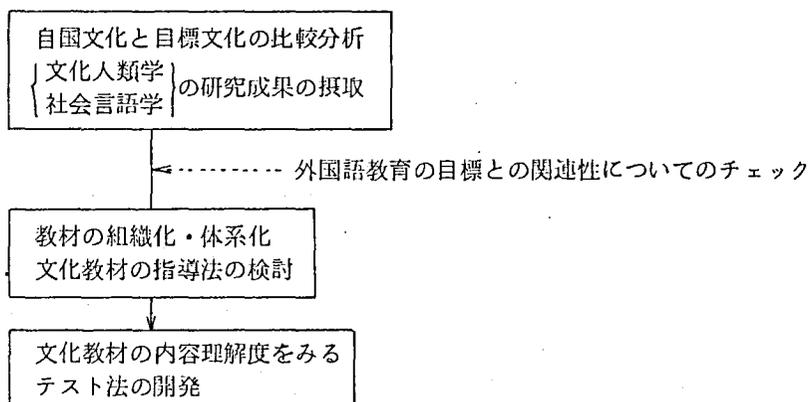
5. 文化教材作成の視点

さて、このように捉えられた文化の諸側面をどのように編成し、教材とすべきであろうか。この点について、Seelye の挙げた文化教授の目標が参考にならう(⑨: 250-253)。文化により条件づけられた行動の意味ないしその機能性、言語と社会的因子との相互作用、日常の場面における慣習的行動、語や句のもつ文化的意味、社会についての評価、他文化の研究、他文化に対する態度、という7点であるが、これは異文化間コミュニケーションおよび異文化間理解を含むもの

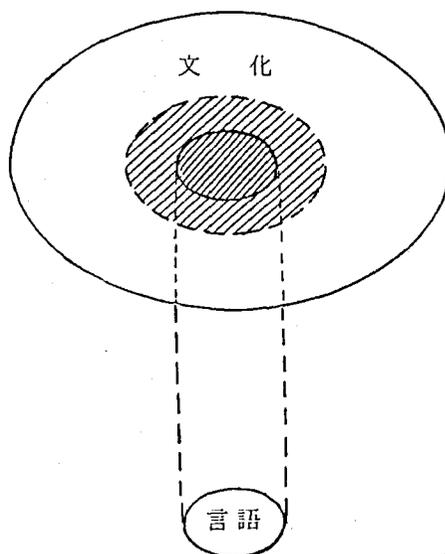
である。このそれぞれに応じた教材が可能であり、また、それぞれの指導法が考えられるべきである。例えば、他文化の研究ということについては、宿題あるいはレポートという方法もあろうし、1時間を図書館での作業に充てることもできよう。勿論、なにを課するかということの考慮も必要であり、それが外国語教育の総体に対していかなる成果をもちうるのかということに対する展望もなければならない。

6. おわりに

以上の考察において欠けている問題の多いことは言うまでもない。例えば、具体的な提示方法については触れていない。これについてもいくつかの主張がなされており、Chastain がそれをまとめているが(①: 392 - 400)、それぞれ検討すべき問題点も含んでいる訳であり、他日機会を得て論じなければならないであろう。また、そのようにして指導したものを、どのようなテストによって、理解できているかどうかを調べればよいのか、という問題も残っている。これらを今後の課題としつつ、求められるべき文化教授の方向を次のように図示してみた。



そして、このような方向を求めるに臨み、現在望みうる段階として、右図の粗密両方の斜線部分を対象とすべきではなかろうかと考える。それは、「外国語を通して」という字句の解釈をそこに求めたいからである。



引用文献

- ① Chastain, K. (1976) *Developing Second-Language Skills: Theory to Practice*, 2nd ed. (Rand McNally)
- ② Greenberg, J. H. (1957) *Essays in Linguistics*. (The Univ. of Chicago Press).
- ③ House, J. (1973) "Culture and Foreign Language Teaching: A Review of Current Trends," *CMLR*, 29, 3, 58-64.
- ④ 井上亮治 (1976) 「文化の差異による障害」『英語教育』25, 2, 27-29.
- ⑤ Jespersen, O. (1904) *How to Teach a Foreign Language*. (George Allen & Unwin)
- ⑥ Lado, R. (1961) *Language Testing: The Construction and Use of Foreign Language Tests*. (Longmans, Green and Co.).
- ⑦ Nostrand, H. L. (1966) "Describing and Teaching the Sociocultural Context of a Foreign Language and Literature," in A. Valdman (ed.), *Trends in Language Teaching*, 1-25. (McGraw-Hill Book Co.).
- ⑧ Rivers, W. M. (1968) *Teaching Foreign-Language Skills*. (The Univ. of Chicago Press).
- ⑨ Seelye, H. N. (1977) "Teaching the Cultural Context of Intercultural Communication," in M. Saville-Troike (ed.), *Linguistics and Anthropology (GURT 1977)*, 249-255. (Georgetown Univ. Press).
- ⑩ 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』(岩波書店).
- ⑪ Tucker, G. R. and W. E. Lambert (1972) "Sociocultural Aspects of Foreign Language Study," in J. W. Dodge (ed.), *Other Words, Other Worlds: Language-in-Culture (NEC Reports 1972)*, 26-30.